

7. 特別研究報告

7-1. 期待×価値志向性とメタ学習方略にもとづくバーチャル・イングリッシュ・プログラム (VEP) 達成度の予測

目的

本研究は、期待×価値志向性とメタ学習方略に関して引き出された VEP 達成度の予測因子としてみなし、次のように問題提起する: 学生の動機(期待×価値)と自己調整(メタ学習方略)の変化は、バーチャル・イングリッシュ・プログラム(VEP)における学業成績にどのような影響を及ぼすのか。

実施方法

定量的なデータは、FUNの学部2年生198人から収集され、記述分析、要因分析、相関分析、回帰分析が行われた。動機(期待×価値)は、主に Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ) を通して、評価された(Pintrich et al., 1993)。学習アプローチは、(Entwistle & Ramsden, 1983)によって開発された Revised Approaches to Studying Inventory (RASI)の52項目を用いて測定された。測定は5段階で行われ、学生が用いる学習への深層的アプローチ、戦略的アプローチ、表層的アプローチに関する傾向を評価した。同時にそれら52項目は、学習アプローチのマクロレベルの三要素(深層的、戦略的、表層的)を示すことに用いられ、そこには各アプローチにおけるいくつかの複合スケールも存在する。VEP 達成度は、プログラム管理者によって VEP において付与された成績を通して、VEP 学習(すなわち VEP 3と4のほか VEP 1と2)の1~2年次に渡り評価された。

実施結果

学生の動機(期待×価値)と自己調整(メタ学習方略)の違いが、VEP の成果に非常に大きな影響を及ぼしたということは明白である。これらの違いは、VEP 学習の1~2年次の間にさらなる変動が起きる。FUN 学生の動機の観点から、ability-approach motivational profile を取り入れた学生が最も成功する。学生は、教材や課題に備わっている本質的な楽しみもしくは喜びを見出すというよりむしろ、教師のような、学生にとって重要な意味のある他者から、言語能力への芳しい評価を受けることによって動機づけられる。成功とは、自己言及用語の中で理解されたということよりも、重要な他者から与えられるフィードバックに関連して規定される。しかしながら、明確なフィードバックによる動機づけの影響は、VEP 学習の1年次には有意性が認められても、2年次には低下する。教師のフィードバックにおける形式と頻度に対して、質問こそ持ち上がるべきである。VEP 学習1年次以降、教師による明確なフィードバックに学生を動機づける効果はない。学習アプローチの観点からは、自己調整(メタ学習方略)に関して、1~2年次に渡り一貫したパターンが観察された。VEP 学習1年次において、深層的アプローチの適用は VEP 達成度の有意な負の予測因子であったが、一方で、戦略的アプローチの適用が正の有意な予測因子になるということがわかった。これらの結果から示唆されるのは、VEP 学習への最適なアプローチが、側面と関連した学術知識に関係しているというよりむしろ、成功への最も有力な予測因子となる評価に対して注意を向けた、後方支援に関係しているということである。大量の課題と締め切りを与えられた学生に、学習への深層的アプローチを取り入れることは不可能であり、そのために、表面的もしくは戦略的レベルで証明された知識が成果として示されることを説明している。ガイドラインや指示を理解できる理路整然とした思考を持った学生でも、そのような環境において教材が効を奏す見込みがあると十分に理解していない可能性もある。VEP は、内容に着目した、言語としての英語に加え、成功(理想的には日本語かつ実際のデータによるもの)に求められるそれらメタ学習方略の重要性を学生に教えることを検討すべきである。全体として、この研究から VEP 改善についていくつかの示唆が引き出され、明確でより強固な教育的実践につながると言える。

特別研究報告書を参照のこと。

実施担当: ダミアン・リヴァーズ